

## 2119 離島覚書（鹿児島県上甕島）



中甕島から上甕島を望む

令和3年11月28日

### ホテルエリアワン・コシキアイランド

甕島へは高速船とフェリーが通っている。高速船は川内港から通常2便（4～9月の間は3便）、フェリーは串木野新港から2便が通う。

鹿児島空港からレンタカーを飛ばし、16時40分発のフェリーに乗った。出発の1時間前に手続きをしなければならぬが、ギリギリ間に合った。当初、キャンセル待ちの1番だった。その後キャンセルが出たと連絡があり、確実に乗れることになっていた。

船内は満員であった。コロナ禍なので、席を1つ空けて座るから座席数は半分になっており、結局座る場所がなかった。一方、座敷もほぼ満席だった。仕方なくデッキや周辺をウロウロする。船員の話では第5波が収束してからこうした状態が続いており、今日はまだ乗客が少ない方だという。

この日は快晴で、串木野新港を出たときから甕島列島が視野に入り、夕日の少し右側に列島が横たわっていた。陽がすっかり落ちた17時55分に里港に着いた。所要時間は1時間15分だった。里には全漁連の広報誌の取材や上甕島漁協の活性化の仕事で2年ほど通ったので、5～6回は来ているだろう。ただし20年以上前のことである。

港に隣接したホテルエリアワン・コシキアイランドがこの日の宿だ。ホテルの建物は、里村交流センターの宿泊施設であった甕島館が2019（平成31）年2月に閉館となった後、ホテルエリアワングループが買い取ったものだ。行き詰った公営宿泊施設を民営化で立て直したものである。なおエリアワングループは下甕島の公営宿泊施設であった「竜宮の郷」も経営しており、経営に行き詰った宿泊施設をM&Aによって再生することを専門とする会社のような。このホテルには「甕島館」時代に1度泊まったことがある。

ホテルは6階建てで、全室オーシャンビューが売りになっているが、多くが和室だ。私の部屋も6畳の和室だった。1階が温泉になっている。夕食はないので外の店を19時に予約し

てから温泉に入る。19時に港の前の駐車場と道路を挟んだ対面に位置する「現在地」という風変わりな名前の店に行った。

上甕島は1889(明治22)年に甕島郡上甕村として1島1村で発足したが、1891(明治24)年に上甕島の分水嶺を境に東側の里村と西側の上甕村に分立し、長いこと1島2村体制が続いていた。2004(平成16)年に1市4町4村の合併で薩摩川内市になり、現在に至る。ちなみに同年の合併によって甕列島全体が薩摩川内市に組み込まれた。

上甕島の面積は44.2km<sup>2</sup>で、海岸線の総延長は81.1kmである。甕列島は、上甕島、中甕島、下甕島の3つの有人島から構成されているが、上甕島は下甕島に次いで大きい。上甕島には旧里村の里、旧上甕村の中野、江石、中甕、小島、瀬上、桑之浦の合わせて7つの集落がある。2015年国勢調査時の人口は2,174人、世帯数は1,081戸であった。



ホテルエリアワンコシキアイランド(左)、里港のフェリー乗り場(右)

令和3年11月29日

## 里地区

朝風呂に入ってからホテルのレストランで朝食を食べ、里の集落を通過して港の北側に位置する漁協に向かう。

里地区は旧里村の中心地で、遠見山のある島との間に形成されたトンボロ(陸繋砂洲)の上と東側の海岸沿いに集落が形成されている。トンボロの東側に地方港湾・里港と里漁港(第1種)が整備されている。港の中央より南側が埋め立てられて広い用地が造成されており、ここがフェリーと高速船の発着場となっており、ホテルもこの用地内に建つ。

トンボロの西側は長い砂浜が広がり、道路脇には松並木が続く。砂浜の北隅にやはり漁船の船溜まりが整備されている。

トンボロ上の集落は菌下、菌中、菌上に、東側の海沿いは村西、村東に分かれ、後述する武家屋敷は海沿いに形成されていた。

今年の10月から、島に4つあった支所(旧役場)が再編され、旧里支所は証明書の発行、市税や水道料金の納付を行う市民サービスセンターになり、職員は大幅に削減されている。里は旧里村の唯一の集落だったので、小学校、中学校、診療所、駐在所、公民館、郵便局、商工会里支所などの公共施設がひと通り揃っている。

里地区には、薩摩川内市立里小学校と里中学校がある。上甕島の中学校はここだけなので、校区は上甕島全域である。なお、中甕地区には中津小学校が置かれているので、上甕島全域

では小学校が2つに集約されていることになる。



トンボロ上に形成された里の集落（左）、松林と砂浜が続く西の浜海岸（右）

### 甑島漁協

8時に漁協の事務所に伺い、石原参事に話を聞き、業務報告書をいただく。

甑島の漁協は、2003（平成15）年に、里、上甑、鹿島、下甑の4漁協が合併して甑島漁協に一本化された。この甑島漁協の本所が里に置かれている。本所以外に上甑（中甑島・平良）、鹿島（下甑島・鹿島）、下甑（下甑島・手打）の3支所と、中甑（上甑島・中甑）、浦内（上甑島・浦内）、長浜（下甑島・長浜）の3つの出張所が置かれている。ちなみに地先漁業権は従来のみだ。

現在の組合員数は正が184人、准が446人である。各支所の組合員数は次のとおりで、最も多いのが下甑支所となっている。

【里・本所】正32人、准98人、【上甑支所】正44人、准168人、【鹿島支所】正36人、准51人、【下甑支所】正72人、准129人。

漁協の正職員は男17人、女5人の合わせて22人である。手打の下甑支所：4人（うち再雇用が2人）、長浜出張所：3人（うちアルバイト1人）、鹿島支所：2人、上甑支所：5人（うち再雇用2人、アルバイト1人）という内訳だ。なお、上甑支所の漁協職員は午前中は平良に勤務し、午後から浦内と中甑の各出張所に移動する。漁協の経営環境が厳しいことから、高齢者の再雇用によって何とか人材を確保している様子が見える。

甑島の組合員が営む漁業は、図1に示すようにキビナゴ刺網、大小定置網、一本釣、小型底曳網、曳縄、カジキ刺網、延縄などである。2020年度の総漁獲量は808トン、生産額は4.25億円であった。このうちキビナゴ刺網の生産額が最も多く、これに定置網漁業が続く。

養殖業は、クロマグロ、カンパチ、真珠母貝、イワガキが営まれている。クロマグロ養殖は漁協が特定区画漁業権の免許を取得し、ニッスイ系の西南水産に行使させている。カンパチ養殖は後述する日笠山水産のみが営む。なお以前は漁協自営でカンパチとシマアジの養殖が営まれていた。また真珠母貝養殖は和田真珠という会社が10年前に区画漁業権を直接取得している。イワガキは平成27年から試験養殖が始まったもので後述する海聖丸ともう1社の2経営体が小規模に営んでいる。

メインのキビナゴ流し刺網は52経営体が免許を有する。漁期は周年だが、4～6月が主漁期で、10～11月にもう一つのピークがある。夜間、集魚灯を焚き、集まったキビナゴを

刺網を流して獲る。漁場は島の周辺であるが、産卵場となる海域は禁漁だ。なお今年はキビナゴの不漁が続いており、今年9月の時点の漁獲実績は昨年比べて136.7トン減、金額にして5,500万円減に及ぶという。なお今の時期は通常、魚体が小さくなるのが普通だが、今年は大きく、異変が続いているようだ。

定置網は、下甑支所の平良地区で漁協自営、鹿島支所では個人経営、下甑支所の青瀬地区では生産組合によって営まれている。

小型底曳網は下甑支所の長浜地区で4経営体によって営まれており、深海性のタカエビを漁獲対象としている。

一本釣りはブリなどの回遊魚を、曳縄はカツオ、スマ、ハガツオなど、カジキ流網はこの地方で「秋太郎」と呼ぶバショウカジキを対象としている。

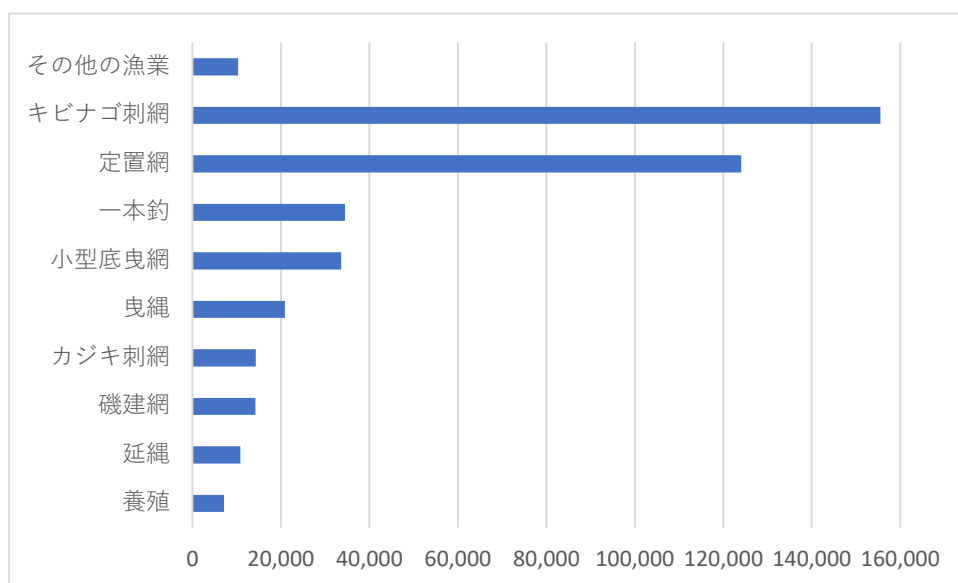


図1 2020年度の甑島漁協の漁業種類別の生産額（千円）

甑島漁協業務報告書より作成

甑島列島で漁獲された水産物は基本的に鹿児島県漁連の市場に出荷している。フェリーの2便に載せて本土の串木野に運び、ここから鹿児島市内に陸送、市場では翌朝の2～4時に取引される。一方、川内港では一般消費者向けに「とれたて市場」が開催されており、市町村合併で薩摩川内市になった関係から、定置網を中心とする一部の漁獲物をこの市場向けに出荷している。直売で売れ残ったものは鹿児島県漁連の市場に送り、翌日、売買される。以前は串木野で開催される朝市や昼市にも出荷していたが、串木野の「市」は集客力がなくなったことから、こちらでの販売は中断している。下甑島には個人でノドグロなどの特殊な魚を東京方面に送る人もいるが、量的には少ない。

旧里村漁協では、「里村水産加工センター」をつくり、キビナゴの自営加工に1982（昭和57）年から取り組んできた。全国的にみても漁協が営む加工事業は当時としては珍しく、パイオニア的な存在であった。1998（平成10）年に初めて甑島に来たのは全漁連の依頼でこの活動取材するためだった。当時、漁獲されたキビナゴにパン粉をつけ、フライ用でファミレスチェーンのジョナサンに卸していた。この事業の仕掛け人がMRビジネスの故佐藤さんで、水土舎設立当時お世話になった人である。この漁協自営の加工事業は今でも健在で

あった。ただしフライ用は作っておらず、IQFと開きの冷凍品の2種類に限定している。ジョナサンとは現在も細々と取引が継続しているようだ。当時と違うのはプロトン凍結機を導入し、高鮮度で凍結している点にある。なおキビナゴの「開き」は機械化されており、中骨を除去した後、すぐに凍結される。こちらはゼンショウ系の浜寿司に販売している。漁協の加工場の従業員は5人で、全員が年金受給の高齢者だという。

表1は甬島漁協が合併した初期の2005年度と2020年度を比較したものだが、この15年間で正組員は半分以下、生産量、生産額ともに半分以下に減少している。これに対して職員数は約6割の水準が維持されている。

表1 漁協合併時と現在の漁協勢力の比較

		2005年度(a)	2020年度(b)	b/a
組員数	正	381	184	0.48
	准	1,250	446	0.36
	合計	1,631	630	0.39
職員数		35	22	0.63
生産量(トン)		1,707	764	0.45
生産額(億円)		9.17	4.25	0.46

甬漁協業務報告書より作成

甬大橋の完成によって3つの島が陸続きになった効果について聞いた。効果が現れているのが購買事業で、特に石油類の在庫がタンクローリーなどによって機動的に運搬できるようになったという(長浜には民間のガソリンスタンドがなく、漁協に依存しているので、地域社会への責任が重い)。ただ、販売面での効果はなく、従来通りだそうだ。素人目には車で各支所を回って集荷できるようになるに違いないと考えがちだが、実際に保冷車や活魚車で各拠点を回るのは難しく、今まで通りの方法で水揚げし、フェリーに積んでいるのが現状だという。また施設の統廃合も進んでいない。

## 亀城跡と武家屋敷

漁協での聞き取りを終えて港に行くと、ちょうど串木野に向かう第1便のフェリーが入港してくるところだった。そのままレンタカーを走らせ、トンゴロと武家屋敷の中間付近にある亀城跡にのぼった。

亀城は鎌倉時代に甬島を支配した小川氏の居城で、ここを本拠地としていた。小川氏は日野宰相宗頼の子孫で武蔵国多西郡小川郷(現あきる野市)より起こった豪族である。承久の変(1221年)で小川小太郎<sup>すえよし</sup>李能が鎌倉方につき北条義時の軍に従い宇治川の戦いで手柄を立てたことからその功績により甬島地頭に任じられた。李能の子、小太郎李直が甬島に入り、ここを支配した。後に小川氏は上甬島を潮田備前守にあずけて、下甬島の手打に住まいを移し、13代370余年にわたって甬島を治めた。

しかし、1595(文禄4)年に島主小川中務大輔有李は田布施高橋(金峰町)へ移され、島津家は曾木、酒匂両氏を代官として派遣した。さらに1611(慶長16)年に本田伊賀守親政を地頭に任じ、1619(元和5)年に来島させた。以来、亀城は明治の廃藩置県まで260余年

にわたり薩摩藩の外城<sup>とじょう</sup>制度の象徴的な役割を果たしてきた。

薩摩藩は外敵からの攻撃に備えて、領内 12ヶ所に外城を配置し、武士団を住ませた。甑島では上甑島の里と下甑島の手打の2ヶ所に外城が置かれた。武士団が居住した一区画は麓と呼ばれ、武家屋敷群がつくられた。この屋敷跡が今でも両地域に残っている。里、手打ともに麓は海に面しており、海路の往来を監視する役割を担っていたと考えられている。近くの浜で採れた人頭大の玉石で石垣をつくり、その上にユスの木を植えて生け垣をつくった。この石垣づくりの武家屋敷跡が整然と続いている。もちろん敷地内には現在でも子孫が住んでいる。

駐車場に車を止め、一番高いところに行くと、中央に戦没者慰霊之塔が置かれていた。戊辰戦争1人、台湾3人、40年戦争19人、日清戦争4人、日露戦争6人、シナ事変32人、残りは大東亜戦争の戦没者で、全員の氏名が刻まれている。40年戦争とは西郷軍と官軍が戦った西南戦争のことである。亀城の展望台からは、トンボロの集落を見ることができる。近くに1904（明治35）年4月に建てられた招魂碑があった。

亀城から下った先に武家屋敷跡が続く。武家屋敷の入口に民宿小橋があった。以前、旧里村漁協取材時に泊まった組合長の家で、古武道の鞍馬楊心流の宗家を引き継いでいる。以前来た時には屋敷内に厳かな雰囲気があったが今回はあまり感じられず、記憶に残るイメージとは異なっていた。

武家屋敷のある通りの入口に八幡神社が置かれている。八幡神社は849（嘉祥2）年に川内の神田神社から分霊を奉じて創建されたとされる古い神社で、大般若波羅蜜多經の經典群が保管されているそうだ。この神社の社家は日笠山家で、その屋敷跡が近くにあった。屋敷跡には甑島渡島400年と書かれた木柱が建っていた。ちなみに日笠山家は甑列島にあるすべての神社の神官を務めているようだ。

八幡神社の前に津口番所跡の看板が立っていた。江戸時代に外国船の出入りや積荷を監視するために薩摩藩がつくった番所で、鹿児島城下から役人2人が派遣されて詰めていたらしい。

数百mほど石垣のある通りを進むと西願寺という寺があった。入口に浄土宗西昌寺跡と書かれている。明治維新後の廃仏毀釈で取り壊され、その跡に現在の西願寺が建てられたようだ。甑島の測量にやってきた伊能忠敬一行はこの寺に泊まったらしい。



亀城に置かれている戦没者慰霊碑（左）、里の武家屋敷跡（右）

## 芋焼酎

昨年、種子島に行った折に鹿児島県の「Go To トラベル」に応募したところ、甑島の芋焼酎が送られてきた。「6代目百合」という焼酎で、ロックで頂いたところ私好みの美味しい酒であった。

以前、甑島来た時に下甑島の手打にある「亀五郎」というブランドの醸造所を見学し、半ダース注文して送ったもらったことがあった。甑島の芋焼酎のメーカーはここだけだと思っていたが、ある時、甑島には芋焼酎のメーカーが2社あると指摘された。そのもう1社がこの「6代目百合」だったのである。このメーカーは塩田酒造といい、里にあることがわかっていたので、どこにあるのかと探しながら歩いた。

武家屋敷から戻る途中の津口番所跡の近くの建物で、サツマイモの傷んだところを処理している人がいた。ひょっとして焼酎の原料ではないかと思って聞くと、生食用のサツマイモだという。そして、塩田酒造はこの先の里小学校の隣にあると教えてくれた。

工場を訪ねると誰もいなかった。里で6代続く小さな家内工業的な醸造所である。どうやら今シーズンの酒造りは終わっているようだ。工場のドアが開いていたので中を覗くと、原料の芋を洗う機械とステンレス製のタンクが置かれていた。タンクは発酵用のものなのか、貯蔵用のものなのかわからない。



原料の芋を洗う機械（左）、ステンレス製のタンク（右）

## 海聖丸

昼食は11時に、取材を兼ねて「こしきの漁師屋・海聖丸」という食事処に予約を入れておいた。少し早い昼食となったのは、12時からの時間帯が予約で埋まっていたためだ。海聖丸はトンボロ上に形成された集落内の一角にある。人家が密集しているので空き地は少なく、したがって駐車場は狭く、5～6台でいっぱいになりそうである。この店は2016年7月にオープンしているからちょうど丸5年を経過したことになる。

メニューをながめて、刺身とタカエビの天井を頼んだ。刺身は今朝とってきたばかりのキビナゴ、カンパチ、マダイ、キハダとタカエビが盛り合わせたものだ。隣の席では、4人家族が大漁満喫セットをいう店の看板メニューを頼んで、キビナゴやタカエビを鉄板で焼いていた。このセットには、刺身の盛り合わせと日替わりの小鉢、キビナゴの漬飯と汁ものがつき、1,980円（税込）とお手ごろ価格である。この1ランク上の茜セットには日替わり小鉢が1品と芝エビに唐揚げがプラスされる。

海聖丸の経営者である日笠山了盛さん（47歳）に仕事を中断してもらい、簡単にインタビューした。了盛さんは、キビナゴの流し刺網、雑籠漁、イワガキ養殖、建網などの多様な漁業を営んでいる。

キビナゴの流し刺網は、魚探でキビナゴを確認すると集魚灯を焚いて魚群を集め、長さ10mほどの刺網を流して、10分ほどで揚げる。刺網を船上でふるって、掛かったキビナゴを落とす。集魚灯の使用時間は3時から夜明け前までと決められている。雑籠漁業は、籠を常時海底に設置しておいて10日に1回程度の頻度で揚げ、中に入った魚を回収する。メジナやオジサンなどの瀬ものが中心である。イワガキ養殖は7年前から始まった。種苗は鹿児島県の水産試験場から提供されるシングルシードを用いており、県が水産振興の一環として進める事業の受け皿になっているようだ。種苗を籠に入れて延縄に籠を吊るす方式で養殖している。漁場は遠見山西側の湾の入口付近になる。里ではこの他に水建システムという設備会社もこのイワガキ養殖に取り組んでいる。イワガキは種苗を導入後、2年で出荷サイズに達するという。海聖丸では夏場を中心に1,000~1,500個を生産しており、店で焼いて食べさせるほかに、小売りもしている。

店は実質的に奥さんが仕切っている。彼女は本土側のいりき出身で結婚前は看護師をしていた。ご主人と同一歳である。もともと飲食店の経験はないそうだが、なかなか板についている。

店を始める前は、島めぐりの観光客を相手に無人島に案内して、浜で海鮮バーベキューを提供するサービスに取り組んだが、これが好評だったことから、店で始めることになったという。事業にあたっては薩摩川内市の六次産業化支援事業補助金を活用して、空き地になっていた土地を購入し、現在の店舗を建てた。

顧客は店のホームページをみて直接やって来る人、旅行会社の斡旋でやって来る人がメインで、夜は予約客のみに対応している。また、海聖丸ではキビナゴの冷凍品や「漁師の沖漬け」と称する地魚の醤油漬けなどの加工品も製造しており、店頭で販売するとともに、ネットショップも開設している。さらに磯遊びや船釣りなどにも対応している。つまり、漁業をベースに様々なサービス化の取り組みを実践しており、まさに漁業の六次産業化を地で行っているわけだ。



隣の席の人が食べていた大漁満喫セット（左）、経営者の日笠山了盛夫妻（右）

## 長目の浜展望所

海聖丸の取材を終えてから長目の浜展望所に行った。長目の浜は上甕島北部に発達した



砂洲で、長さ 4 km、幅 40～100mほどもある。この砂洲の背後に潟湖群が形成され、北から海鼠池、貝池、歙崎池という。3湖沼の水質は後述するように異なっており、生息する生物にも特徴がある。砂州上には植物群落が形成されており、季節風の影響を受けて風衝草原、風衝低木林、低木林へと変化する。また、砂州上に堆積している砂礫の大きさは北側から南東に向かって小さくなり、海水の透水性の違いで池の塩分濃度が異なっている。

展望台から県道 352 号を進み、海鼠池と貝池の間を海岸まで下った。玉石の海岸が続き、20 年ほど前に来た時には中国大陸からの大量の漂流物が打ち揚げられているのに強い危機感を覚えたことがあった。しかし、今回は漂着物は意外に少なかった。

海鼠池の面積は 55ha、水深は 24m で、外海とは玉石を通じて海水が出入りしているという。したがってナマコの生息が可能で、江戸時代に長崎県の大村湾からナマコを移植したと伝えられている。この池でのナマコの採取は認められており、以前来た時にナマコをたくさん頂いたことがあった。一度に食べきれないので、ボイルして干しナマコに加工したが、海鼠池のナマコは極端に小さいのが特徴で、干しナマコに加工すると、鉛筆ほどの太さに縮小したと記憶している。

隣の貝池は面積 16.2ha、水深は 11.6m で、上層は雨水が流れ込むため成層状態が維持されている。そのため下層は還元状態を呈し硫化水素を含む海水層になっている。その境目にクロマチウムという光合成細菌が濃密に分布しているらしい。ここの陸水学的特徴は学生時代に日本海洋学会の大会で聞いたことがあった。

一番南にある歙崎池は面積 14ha、水深は 5.9m で、淡水に近く、オオナマズが棲むという伝説がある。このように 3つの池は 3者3様の顔をもっている。



手前から歙崎池、貝池、海鼠池（左）、玉石で築かれた砂洲（右）

## 日笠山水産

電話で取材のアポをとっていたので、約束の 13 時すぎに日笠山水産(株)の事務所に伺った。加工場に併設された事務所で日笠山誠（50 歳）社長に話を聞いた。奥さんは経理などの事務を担当しており、脇で作業をしていた。建物の奥が加工場になっている。

上述したように里の武家屋敷の一角に「社家日笠山屋敷址」があったことから、日笠山家は里では古い家柄に違いない。このことを誠さんに聞くと、日笠山家はもともと川内市内からやってきた宮司の家で、八幡神社の宮司を務めていたそうだ。誠さんの両親とも日笠山の姓で、本家は網元、母方の家は宮司だったという。分家して漁師になり、誠さんはその 3代

目に当たる。ちなみに先に訪れた海聖丸も同じ日笠山姓であったが、実は従兄にあたるようだ。海聖丸とは以前一緒にキビナゴを獲っていた時期もあり、その後独立したという。

誠さんは父親と息子（28歳）の3世代で漁業と水産加工、販売事業を営んでいる。甬島では上述したようにこの15年ほどで組合員数が半分以下になっているが、3世代にわたって漁業を営むのは甬列島全体を見渡しても稀有な存在といえよう。

彼は里の出身で、高校を卒業後名古屋の魚市場にある仲卸の会社に就職したが、3～4ヶ月で喧嘩してやめ、その後、大阪の叔母の会社で働いた。結婚は早かったようで、長男は1989（平成元）年に生まれている。1991（平成3）年、21歳の時に、上甬島にUターンした。錦江湾のカンパチ養殖業者のところで養殖の技術を学び、4年後の1995（平成7）年に漁船を購入してカンパチの養殖を始めた。1996年に個人として創業し、2016年8月に株式会社として登記、2018年9月にキビナゴ加工の新工場を竣工して3年を経過し、現在に至る。この間順調に発展してきた。

日笠山水産は、漁業、水産加工、販売を一貫して営んでおり、いわゆる「漁業の6次産業化」に取り組む。六次産業化は、1つの事業体が漁業、加工、販売を一貫して営む垂直統合型と、地域内の漁業者と加工業者や漁協が連携して営む水平分業型に大別されるが、上甬島では前者に日笠山水産㈱、後者に甬島漁協が当てはまる。

同社が営む漁業は、キビナゴの刺網、モジャコのすくい網、バシヨウカジキの流し刺網、雑籠と多様であり、加えてカンパチも養殖している。天然資源に依存する漁業は年による豊凶変動が激しく、リスクを分散するためには漁業の多様化を進めることが重要であり、むしろ「選択と集中」は危険なのだ。

キビナゴ刺網の漁期は基本的に周年であるが、漁獲の最盛期は5～6月、もう一つのピークが10～11月に形成される。集魚灯でキビナゴを集め、3時から夜明けにかけて操業する。人によって使用する刺網の長さは異なるが、日笠山さんの場合は10mほどである。流した刺網にキビナゴが掛かり、網を船の上に引き揚げ、振るって落とす。日笠山さんのところは、父親と息子のグループと日笠山さん本人と雇った乗組員のグループの2隻で操業している。キビナゴは砂に粘着性の沈性卵を産み付けるが、その場所はだいたい決まっているため、産卵場付近での操業は自粛している。昨年はカタクチイワシやウルメイワシが大量発生し、2トンほど斃死した。イワシ類とキビナゴは餌が競合するため、イワシに餌を取られた影響でキビナゴの魚体は小さかったという。

モジャコのすくい網を営むのは甬列島のなかでは日笠山さんのところだけだ。漁期は3月25日から約1ヶ月間で、規定量に達すると終漁となるので、終漁期は年によって異なる。今年是不漁で、1ヶ月以上に及んだらしい。漁場は甬島から離れた南方海域のためモジャコ漁の間はキビナゴは採らない。採取したモジャコはブリ養殖の盛んな東町漁協に供給している。

バシヨウカジキは現地では「秋太郎」と呼び、その名のとおり9～10月ごろに鹿児島県周辺に来遊してくる。約800mほどの刺網を流し、1時間ほど置いてから引き揚げる。操業は夜間で、夜明け前までに3回ほどこの作業を繰り返す。今年のバシヨウカジキ漁は不漁のようで、この漁業は年による変動がかなり大きい点に特徴がある。

雑籠漁業は主としてスジアラを狙う。スジアラが穴に入る習性を利用し、籠を覆い影をつ

くる。オジサン（ウミゴイ）が餌になり、これが籠の中に入るとスジアラも入ってくる。

漁業に加えて、上述したようにカンパチも養殖している。漁場はトンボロの北側に位置する島の東側に西崎という岬があるが、この先端につくられた防波堤の内側である。ちなみに上述した海聖丸のイワガキ養殖の漁場もこのカンパチ養殖場の脇に置かれている。カンパチは小割生簀で養殖、生産額は500万円ほどで小規模だ。カンパチの種苗は種子島のモジャコ漁の漁師からモジャコに混ざったカンパチの稚魚を分けてもらっている。



日笠山水産の親子3世代（左）、カンパチの養殖生簀（右）

周知の通りカンパチ養殖の産地は錦江湾であるが、離島は餌や流通のコストが相対的に高く、通常の市場流通では錦江湾の産地に太刀打ちできないというハンディキャップを抱えていた。漁協でも自営事業でカンパチやシマアジを養殖していたが、事故などが重なったこともあり、10年ほど前に撤退している。日笠山水産では島民が子どもや親戚・知人などに島の特産品を贈答することに目をつけ、島民向けにカンパチを切り身等に加工処理して直接売ること 시작했다。市場出荷でなく、自分で販売することで利益を出そうとしたのである。この取り組みは贈られた側から直接注文を受けるなどして顧客は次第に広がり、現在では小売りから卸売まで直接全国に売っている。こうした成功体験が次のキビナゴの加工販売へと発展していくことになった。

日笠山水産では10年ほど前からキビナゴの加工に取り組み、次第に販路を広げてきた。そして2018年9月に現在の加工場が竣工している。

朝、漁獲したキビナゴは当日の市場の相場をにらみながら、安価だった場合には加工に回し、鮮魚で販売した方が利益で出ると見込んだ場合は、串木野経由で鹿児島市の魚市場に出荷する。一般の鮮魚は鹿児島市場の県漁連の卸売会社に出荷するが、スジアラのような活魚で出荷する魚に関しては、県漁連が活魚車を持っていないので、もう1社の卸売会社である九州中央魚市(株)に出荷する。この場合、串木野の活魚輸送業者に運送を委託する。

キビナゴの加工品アイテムは、天日干し、IQF（バラ凍結品）、醤油漬け、開きの冷凍品である。もちろん、市場出荷以外にも生鮮品を直接販売している。IQFや開きの冷凍品は品質維持のために冷凍機が重要な役割を果たすことになるが、この加工場ではCAS（キャス）や漁協で導入しているプロトン凍結機のような電磁誘導を原理とする冷凍機は使用していない。両方とも試したことがあるそうだが、IQFにはグレーズをかけるため、現在導入している宮崎県の会社の製品が合っているという。ちなみに凍結温度は $-35^{\circ}\text{C}$ である。天日干しの塩干品には、塩分を8%に調整した海洋深層水が使用されている。下甕島の手打

に海洋深層水の供給施設があるので、ここからタンクローリーで運んでいる。キビナゴの開きは漁協で使われているものと同様の小魚開き専用機が導入されている。腹から開いて真空パックし、 $-35^{\circ}\text{C}$ で急速凍結する。なお醤油漬けと塩干品は県の品評会で賞を受賞している。

加工場ではベトナム人の研修生6人を含め10人が働いている。研修生は3年弱前から来ているようで、集落内の寮で暮らす。しかし新型コロナのため日本に来てから一度も母国に帰っていないという。

日笠山水産の加工品は、2010年に名古屋市の「旬鮮台所ひのゑ」という居酒屋に卸したのを手始めに、居酒屋、飲食店、給食などの飲食業界、鹿児島空港の売店などの土産物店、ネット通販や島の特産品ギフトなど多様な業態を通じて流通している。一時期、全日空の機内食で使われたこともあるし、最近では上述したキビナゴの開きがスシローの握りずしのネタとして使われ、さらにIQFは同社の天麩羅食材にもなっており、確実に販路は拡大してきた。

日笠山水産の年商は6,000万円ほどらしい。しかし誠さんは現状に満足していない。現在、鹿児島大学水産学部の鳥居先生を始め食品学科の先生と連携してキビナゴの新しい商品開発をめざしている。また島出身で日刊スポーツの役員をしている塩田さんの協力を得て、「キビナゴ女子会」なる会で、キビナゴの魚食普及に努めている。

一方、日笠山水産は、①主要な産卵場での禁漁、②小さな目合の網の禁止、③灯火時間は2時以降、④日曜祭日の休漁、⑤稚魚の保護区の設置、⑥キビナゴ一辺倒の漁獲の禁止など、キビナゴ資源の持続的利用をめざしている。つまりキビナゴの資源は限定されているから「成長産業化」は難しい。持続的利用を図りつつ、販路を広げていくというよりも、限定された資源の枠の中で如何に付加価値を高めていくかが課題になっている。つまり「脱成長」という方向のもとで、如何に甕島の漁業を盛り上げていくかが問われているのだろう。



加工場で働くベトナム人研修生（左）、日笠山水産の加工品（右）  
写真提供：日笠山水産

## 遠見山

トンボロの北側に位置する遠見山（250.3m）の周囲を一周する山道が整備されている。日笠山水産を辞してから時計回りに周回道路を一周することにした。途中、鹿児島大学の鳥居先生から電話が掛かってきた。どうやら日笠山さんが私が訪れたことを鳥居さんに連絡したらしい。山の中で電波の状態が悪く、うまく話ができなかった。

周回道路の途中を西側に下り、西崎の南側に建設された港に降りた。大きなバージ船と小さな漁船が数隻係留されていた。この先の防波堤の内側に日笠山水産のカンパチ養殖の小割生簀が置かれている。この生簀に近接して、海聖丸のイワガキの延縄式養殖施設があった。

周回道路に戻り、さらに進んで市の浦の海水浴場に出る。海水浴場からは舗装された広い道路になった。途中に「七人合頭・八人合頭」と書かれた標識があったので見に行った。薩摩川内市の教育委員会が書いた解説文によると、承久の変（貴族政治から武家政治への大転換の契機になったとされる戦争）で鎌倉幕府に味方した小川太郎季能はその功績が認められて甕島を下賜され、その子の太郎季直が市の浦に上陸したが、島の先住者と戦闘になり、両方に戦死者が出てそれぞれ七人、八人を同じ墓所に埋葬し自然石を墓標として吊ったと伝えられているという。



西崎のカンパチ養殖の小割生簀とイワガキの延縄養殖施設（左）、自然石を墓標とした七人合頭・八人合頭

再び里の集落に戻り、公民館の図書室で郷土関係の資料を閲覧し、関係する文献をコピーした。珍しくここではコピー代を徴収されなかった。亀城跡に置かれていた戦没者慰霊之塔に40年戦争で19人が亡くなっていることが記されていたので、甕島の人々は西郷軍として戦ったのか興味があった。このことを事務の女性に尋ねると、郷土誌に詳しい人に連絡をとってくれて、その人から電話が掛かってきた。塩田秀雄さんといった。彼の話では、戦死者は全て西郷軍、上甕島全体ではこの戦争で31人が戦死したとのことであった。また、甕島には西郷の私学校の分校があったという。

### 上甕島と中甕島をつなぐ大橋

公民館を後にし、この日の宿を予約した中甕島に向かう。里から県道348号を西に向けて走り、峠にさしかかったあたりの見晴らしのいい場所に遠目木林道開通記念碑が置かれていた。ここから先が旧上甕村になる。

坂を下ると、中野地区の集落を経て、旧甕村の中心地である中甕の集落に至る。突き当たりが中甕港で、ここを右折して海岸沿いの道路を走る。

やがて上甕島と中甕島の間にある中島という無人島に架かる甕大明神橋が現れた。その手前に三角形をした展望広場があり、ここから橋の写真を撮った。中甕の湾内にはクロマグロの養殖施設も置かれていた。

甕大明神橋は幅8m、全長420mで、1989年9月から1993年3月までの4年半をかけて建設された。中島を経由して、中甕島との間に鹿の子大橋が架かる。こちらの橋はアーチ橋

で、全長は 240m である。甕大明神橋にさきがけて 1990 年 3 月に完成している。この 2 つの橋によって上甕島と中甕島は陸路で繋がった。

橋を渡って、小池トンネル（全長 452m）を抜け、中甕島を貫く平良トンネルの手前を左折して、坂を下った先が平良の集落である。平良の集落の奥まったところにある「民宿平良」に入った。



上甕島と中島を結ぶ甕大明神橋（左）、中島と中甕島を結ぶ鹿の子橋（右）

令和 3 年 11 月 30 日

#### 西南水産(株)

中甕島から前日通った鹿の子大橋、甕大明神橋を経て上甕島に入り、小島トンネル（1998 年 2 月に竣工、全長 817m）を抜け、浦内湾東側の湾奥にある小島という集落に着いた。小島の集落は瀬上の集落の南にあり、浦内湾に流入する小さな小島川の両岸に形成されている。トンネルができる以前は山越えのくねくねした道だったので、おそらく相当時間がかかったであろう。旧漁協の建物（現上甕支所浦内出張所）の隣に西南水産(株)の作業所があった。

護岸では養殖マグロの受入準備を整い、もうすぐ養殖場から船が戻ってくるという。5 分ほど待機していると、4 人が乗った船がマグロを積んでやってきた。少し遅れて、2 人のダイバーを乗せた船外機も岸壁に到着した。

早速、養殖マグロの水揚げが始まる。最初に現場で処理した時に発生したマグロの内臓や鰓が廃棄物用のドラム缶に入れられた。続いて鰓と内臓を除去したクロマグロがしっぽにロープを括りつけられ、4～5 本を束にして船倉から引き揚げられた。ただちに岸壁に用意してあった水氷を張ったタンクに移された。クロマグロのサイズは 60 kg 前後で、この日は 20 尾ほどが収穫された。最後に病気で死んだクロマグロの幼魚が引き揚げられた。死因を調べるために検査に送られるという。

マグロは潜水士が生簀の中に潜って、写真に示すような電気ショッカーを使って仮死状態にしてすぐに引揚げ、内臓を処理する。上甕には浦内湾と中甕湾の 2 ヶ所に同社の養殖場があり、生簀の総数は 16 基に及ぶ。生簀は 40m 角の四角形と 40×80m の長方形の 2 つのタイプがある。小さなサイズの時は各生簀に 2,000～3,000 尾を収容し、少しずつ収容尾数を減らしていき、出荷前は最終的に 1,000 個体ほどに調整するという。

ちなみに南西水産はニッスイ系で、もとは中谷水産という会社が 20 年ほど前からマグロ養殖に取り組んでいたが、10 年ほど前に経営権が移ったようだ。西南水産は西日本を中心

に7～8の事業所を有する。従業員は転勤してきた人と地元採用に分かれる。現在、この事業所では19人が働いている。若い人が多かった。また奈留島のように外国人はいない。



養殖クロマグロの水揚げ風景（左）、マグロを仮死させるための電気ショッカー（右）

## 桑之浦

クロマグロの水揚げを見学してから田の尻展望所に上がり、長目の浜の湖沼群を昨日とは反対の北西側から見る。続いて浦内湾の西側にある唯一の集落、桑之浦へ向かう。10時26分に到着した。集落から先に道路はなく、行き止まりになった。

漁港には漁船1隻と船外機が1隻しか係留されていなかった。隣の船着場にはやはり漁船1隻と船外機1隻が置かれていた。船着場の前にRC2階建ての家があったので、この家の漁船と思われる。この日は北西風がすでに強くなり始めていたから出港している船はないはずだ。漁船数から判断すると、桑之浦には漁師が2人いるのだろう。

桑之浦の集落は谷あいに細長く形成されている。集落の緩やかな坂を登っていくとおばあさんたち4人が駄弁っていた。1人は化粧をした上品そうな人だった。おばあさんたちによると、桑之浦は半農半漁で暮らしを立てていたから、段々畑が山の上まで続いていたそうだ。漁業ではトビウオ、カマス、イカ、キビナゴなどを獲ったという。

おばあさんたちによると、現在の世帯数は23戸というから市の住民基本台帳上の数値と一致する。2021年11月1日現在の世帯数は23戸、人口は35人、4月1日時点の高齢化率は81.6%に及ぶ。1965年時点の人口は321人だったので、この半世紀余りの間に1/10近くに減少している。しかもほとんどが高齢者であることから、廃村の危機に直面しているといっても過言ではない。上甕島の7つの集落（里、中甕、江石、中野、瀬上、小島、桑之浦）の中では最も人口が少ない。家の数は世帯数よりもはるかに多いので空き家ばかりということになる。

集落内に三面張りの水路が2本あり、途中で合流して1本となって浦内湾にそそぐ。集落の背後は急峻で、大きな砂防堰堤が見える。2本の水路の合流点の近くに廃校になった小学校跡があった。1967（昭和42）年ごろに廃校になり、浦之内小学校に統合されたい。桑之浦から歩いて通学するのは困難だったので、浦之内湾を船で横切って送迎したようだ。同様に中学校は中甕に船で通った。現在、桑之浦小学校跡には住民センターの建物が建つ。またその脇には集落を見つめるように墓石が並ぶ。

集落背後の高台には宇佐八幡神社が置かれていた。長い階段を登った先に、赤く塗ったペ

ンキがはげた神社があった。境内には樹木が茂り、視界は悪い。



路傍で駄弁っていたおばあさんたち（左）、桑之浦の集落を貫く道路（右）

## 瀬上

浦内湾は湾奥で二手に分かれる。東側の湾奥に形成された集落が瀬上である。湾奥に流れ込む小さな瀬上川の西側の山裾に家が立ち並ぶ。川の東側はもともと海だったところを干拓によって田を造成したようだ。

1965（昭和40）年の国勢調査時の瀬上地区の人口は787人だった。2021年11月1日時点の瀬上地区の世帯数は82戸、人口は131人なので、約半世紀の間に1/6になった勘定である。

人口が多かった時代には浦内小学校があった。この小学校には桑之浦と瀬上、小島の3つの集落の子供たちが通っていた。しかし児童数が減少したことから2008（平成20）年3月に閉校になっている。開港以来の卒業生数は2,605人を数えている。

旧浦内小学校の跡地周辺はふれあいパーク浦内という公園になっていて、校庭の跡にはソーラーパネルと蓄電池が置かれていた。再生可能エネルギーの島内自給の可能性をめざす実験も行っているのだろうか。

また、近くには特攻船・震洋の模型が置かれていた。第34震洋隊が戦時中にこの小学校に配置されていたそうで、この基地の存在を把握していた米軍はグラマン機による機銃照射を小学校に浴びせたそうだ。幸い人命の被害はなかったようだが、こうした歴史的事実を後世に知らしめるために模型を置いたと案内板に書いてあった。



ソーラーパネルが置かれている旧浦内小学校の跡地（左）、特攻艇・震洋の模型（右）



## 江石

瀬上から小島トンネルを抜けて中甕漁港に出る。中甕の集落から旧上甕中学校の下の橋を渡り、峠を越えて江石に向かう。つづら折りの道を下った先が江石の集落である。

集落の中央に小さな川が流れ込んでいて、集落は川を挟んで2つに分かれている。地形から見て、川の東側はかつて海だったところを干拓したようで、干拓地と思われる農地の海側に碁盤の目状に家が整然と並ぶ。家の前は砂浜になっており、この砂浜を守る目的なのか、浜の前面に長い防波堤が築かれている。一方、西側の集落は山裾に形成されており、海側は埋め立てられて江石漁港（第1種）が整備されている。なお、干拓地と推定される農地は耕作放棄地となっていて、雑草で覆われていた。

1965年国勢調査時の江石の人口は716人。2021年11月1日の住基台帳上の人口は117人、世帯数は71戸なので、この間に人口は1/7に減少、人口と世帯数からみて、単身者が圧倒的に多いものと思われる。かつては江石小学校があったが、1969（昭和44）年に中甕地区の中津小学校に統合され、廃校になっている。校舎は撤去されているが、体育館が住民用に残されていた。

江石漁港に置かれていた船は、漁船2隻、船外機3隻の合計5隻だけだった。漁師の数は少ないものと推定される。漁港の背後に恵比寿様と浄土真宗本願寺派の法昭寺があった。寺は普通の人家を思わせるような建物だった。



干拓地と思われる耕作放棄地（左）、江石漁港と集落（右）

## 中野

江石から山の中の細くくねくねした道を進むと、里と中甕を結ぶ県道に出た。昨日通った道だ。この県道脇に集落が形成されており、中野と呼ばれている。上甕島の集落の中では、唯一海に面しておらず、内陸部に位置する。したがって漁業は営まれておらず、農業が中心だったのだろう。県道に沿って小さな川が流れており、中甕に向かって、なだらかな傾斜の平地が連なることから、米作が盛んだったのかもしれない。

1965年国勢調査時の人口は167人で、7つの集落の中では最も少なかった。2021年11月1日時点の住民基本台帳上の人口は37人、25戸なので、やはり大幅に減少している。ただ桑之浦を若干上回っている。

道路わきの田んぼと思われる平坦地には牧草ロールが積まれていた。ひょっとするとこの田で飼料米が作られているのかもしれない。そうだとすると、牛の繁殖農家がいる可能性

もあるが、確認は取れなかった。

緩やかな坂道の中甕に向かって下っていくと、左手に九州電力の火力発電所が現れた。煙突に2本あり、おそらく重油を焚いているのだろう。



県道沿いに形成された中野の集落（左）、田んぼと牧草ロール（右）

## 中甕

中甕は旧上甕村の行政の中心地であった。集落内には簡易裁判所、図書館、診療所、派出所、消防署、郵便局、保健センター、中津小学校、老人福祉センターなどが置かれている。2000～2001年にかけて実施した上甕村産業育成ビジョン策定調査では、老人福祉センターの会議室で委員会が開かれた。

薩摩川内市と合併してから、甕列島の旧4村の役場は市役所の支所になっていた。しかし今年の10月に再編されたことはすでに述べたが、中甕に置かれていた旧上甕支所は10月から市役所の甕振興局に格上げされ、甕列島全体を統括する中心になったのである。これは甕大橋の開通によって人の住む3つの島が陸路でつながったためだろう。

1965年の国勢調査時に旧上甕村の世帯数は1,221戸、人口は4,730人（中甕島の平良地区を含む）であった。このうち中甕の人口は1,354人で最も多く、約3割を占めていた。

昼の休憩時間まで少し間があったので振興局内の教育委員会に行き、「上甕村郷土史」を閲覧する。旧上甕村でも西南戦争に参加した島民が54人おり、そのうち戦死した者11人、処罰された者10人であった。

## コシキテラス

上甕島には定期船が発着する港が2つあった。地方港湾の里港と第4種漁港の中甕漁港である。このうち中甕漁港は上甕島の玄関口であったが、島の寄港地の集約化に伴って2012（平成24）年4月に中甕漁港への寄港が廃止されたため、すっかり寂れてしまった。現在は観光船「かのこ」が発着しているだけだ。この船は下甕島の鹿島地区の断崖絶壁を海からのクルージングによって眺める観光船である。

上甕村の産業育成ビジョンの仕事で合計8回ほど上甕島を訪れているが、この中甕漁港をよく利用したものだった。当時の船客待合所は定期船が寄港しなくなったことによって使われなくなった。施設の有効利用を図るため、待合所は2016（平成28）年に「コシキテラス」と名前を変えてリニューアルされ、カフェと土産物売り場、観光船の受付窓口、バス

待合所などが併設されている。

この「コシキテラス」を運営するのが、「東シナ海の小さな島ブランド(株)」という長ったらしい名前の会社である。山下商店という島の小さな豆腐屋が中心になって2012年に設立された。コシキテラスの他に農業生産・加工、観光事業、通販事業、地域デザイン事業、執筆・コピーライトなど幅広い分野を手掛ける島おこしの会社である。スタッフは若い人が多い。

ちょうど昼食の時間になっていたのので、コシキテラスのカフェで、ピザパンとアンドーナツを購入し、コーヒーを飲んだ。私の他に1組の顧客がいただけなので、経営はちょっと厳しいに違いない。

コシキテラスの道路を挟んだ反対側にスーパーがあり、ここで甑島産の芋焼酎・六代目百合と亀五郎の2本（1升瓶）を買って車に積み込んだ。



船客待合所をリニューアルしたコシキテラス（左）、閑散としている中甑漁港（右）

## 郷土資料館

振興局と同じ敷地に上甑郷土館が置かれた建物がある。普段は鍵がかかっているのので、市役所の人に頼んで開けてもらった。郷土館は2階にあるが、階段の壁に明治百年を記念して書かれた巨大な上甑村の鳥瞰図が掲げられていた。中甑島を含む7つの集落の各家々と世帯主の名前が書かれている。おそらく製作に1年以上はかかったと思われる大作である。

郷土館には昔使われた農具、漁具、生活民具、山林具などが収集、展示されている。また各集落の古い写真や尺八、三味線などの楽器類も置かれていた。

展示物の中で印象に残ったのが、「タナシ」と呼ばれた葛の繊維から作られた布であった。葛の蔓を採取し、剥いた皮を灰汁で煮て水に晒し、天日干しして乾燥させ、叩いて揉み解す。ほぐした糸を糸車で紡ぎ、地織（座って使う初期の織機）で織ったものだ。おそらく全国各地に葛布が残っていないことをみると、あまり丈夫ではなかったものと推察される。しかし島では山仕事や野良仕事の時に着たといわれ、大正時代まで作られていたらしい。この葛布を作る時の道具や着物類が展示されている。上甑村管内では瀬上地区でこの葛布の生産が盛んだったようだ。

資料館が入った建物の1階奥は老人福祉センターになっており、20年ほど前にここで何回も会議をしているのだが、頭に残っているイメージと現実とはほとんど合致しなかった。本当に人間（私）の記憶とは不確かなもので、過去とはいったい何だったのだろうと思う。

続いて振興局の地域振興課に行き、担当者から上甌島におけるクロマグロ、真珠、イワガキの各養殖について聞き取った。



昔使われていた各種の道具類（左）、葛の繊維で作られた衣類と葛布を作る道具類（右）

### 真珠養殖

上甌島の北西部に深く切り込んだ浦内湾はきわめて静穏な海域である。かつてこの湾内では真珠養殖がさかんであった。ビジョン策定の委員会のメンバーに上村真珠の和田岸夫さんがいたので、当時、船で湾内の真珠養殖施設を案内してもらったことがある。

役場で聞いたところ、以前3経営体が真珠養殖を営んでいたが、今はゼロになり、わずかに真珠の母貝養殖を1経営体が営んでいるだけだという。和田真珠というから当時の和田さんが独立して母貝養殖をしているのかもしれない。従業員は数人だそうだ。

役場から海岸沿いの道路を走り、小島トンネルを抜けて浦内湾を見に行ったら。道路から少し奥まったところに真珠養殖の作業小屋が見えたが、母貝養殖の施設は確認できなかった。

来た道を引き返し、湾岸道路を甌大明神橋のところまで行き、浦内湾沿いに北上するがやはり母貝養殖の施設はなかった。この道は上甌県民自然レクリエーション村で行き止まりになった。この先に母貝の養殖施設があると思われるが、陸からは見えないのだろう。仕方なしに来た道を引き返す。レクリエーション村の対岸には例のクロマグロの養殖生簀が見られた。



真珠母貝養殖の作業小屋

激しい雨になってきた。甌大明神橋、鹿の子大橋を渡り、甌トンネルを抜け、甌大橋を渡って下甌島に入る。

### 【文献】

里村郷土誌編纂委員会（1985）：里村郷土誌（上巻）、里村。